

斎藤正二著作選集

全7巻 八坂書房

右の購入を予約します

住所
〒
氏名

電話

氏名

取扱書店

刊行によせて

一昨年の秋、旧友の八坂書房社主が拙宅に見えられ、先に刊行した『杉本つとむ著作選集』（全十巻）に続いて、同形式で私の著作を纏めて刊行したいが御承諾頂けまいか、との申し入れがありました。当方は、あまりにも唐突なご提案に唯只びつくりしてしまい、暫し口を喋むばかりでありませんでした。自分ごとと卑小な文筆家が著作集のようなものを出さうなどといった考えを抱くとき卑小な文筆家が著作集のようものを出さう結果を生むのは不可避です、せつかく最晩年に及んで自己相対化の好境涯に悟入しかかっているときに小人物の爆火を煽るような勾引はお止めください。と、まあ、斯んなふうにお答えしたので、これは決して格好付いたものでも、勿体振ったものでもなく、本心そのものを吐露した心算です。すると社主は「そう仰るだろうと予期していました。急ぎませぬ、暫く猶予期間を置いてゆつくり結論を導き出さうではありませんか」といわれ、帰られました。

過去の業績の貧乏貧乏が目に見え、愈々自己嫌悪が募るばかりでした。一番に目立つ欠陥は、当方が一九八五年秋に慢性膵臓炎（当時は未だ膵臓癌の病相が確定されず怪しい患者には一括して此の病名が付けられていた由、年隔ってから主治医に聴かされた）を患って以降、仕事らしき仕事を殆ど為遂げておらず、依頼される註釈の作業のほか短い雑文を辛うじて書いた、というに過ぎぬ事実でした。五十歳台後半以降、殆ど何もせず、予後暮らしの病弱を口実ないし分疏として怠けに怠けていたのは否み難い事実でした。それで、ますます引つ込み思案の殻の中に身を潜め、往時日を経るばかりでした。

もうあの話は立ち消えになったのかと、半ばほつとした気持ちになり、半ば張り合ひを覚えたりした数ヶ月のあと、突如（という感じ）で八坂さんが見えられ、「第一回配本は明年四月頃という線で、全巻構成およびそれにもなる原稿蒐集をお始めくださいますか」と畳み込むことに決められる。茲で、わたくは全面降伏し、万事お任せなことに決めた。八坂さんは、抑押の頭初から、人生舞台の作法なんぞは見透かしておられ、人間事の（時）および（暮）を精確に攫んでおられたに相違ないと気がきました。斯様な人物と邂逅うことの出来た我が身の幸運を、いま、あらためて観せずにはられません。わたくしは僻んで瀧井孝作・三好達治両大家より誘掖を受く。

一九七五年（昭和五十年） 東京都八王子市に生まれる。
一九五三年（昭和二十八年） 東京大学文学部教育学科卒業。
一九五八年（昭和三十三年） 東京大学大学院満期退学。
この間に、雑誌『日本短歌』（日本短歌社、編集長、創元社編集部々員、現代日本詩人全集）（東京創元社）、雑誌『短歌』（角川書店）編集長などを歴任。三〇歳になった日を機に初志に戻り晩年に熱中、東京大学文学部旧制大学院にては大畠清博士（宗教史・宗教学担当）の弟子となるを許される。
一九五六年（昭和三十一年） 日本大学芸術学部講師
一九六〇年（昭和三十五年） 日本大学文学部講師
一九六二年（昭和三十七年） 國學院大学文学部講師
一九六五年（昭和四〇年） 二松学舎大学助教
この間に、國學院大学神道史学科大学院博士課程の授業を欠かさず受講、西田長男・堀一郎両博士より親しく指導を忝うす。学外では西脇順三郎博士の知遇を得、古代詩学・言語哲学の領域で教示を受く。また芸芸面で瀧井孝作・三好達治両大家より誘掖を受く。
一九六七年（昭和四十二年） 二松学舎大学教授
一九七六年（昭和五十一年） 東京電機大学理工学部教授
この間、名古屋大学教育学部大学院、大阪市立大学文学部大学院、大分大学教育学部等に非常勤講師として出講。
一九七八年（昭和五三年） 名古屋大学より教育学博士の学位を授与される
一九八七年（昭和六十二年） 創価大学教育学部教授
二〇〇一年（平成十二年） 同大学名誉教授となる

斎藤正二 著作選集

予価 各九、八〇〇円(本体価格)
造本体裁 A5判・上製・函入り 本文9ポ1段組み 各巻約五〇〇〜六〇〇頁

八坂書房 〒110-0664 東京都千代田区猿樂町1-4-11
電話・03-3933-7975 振替0115-0833915

八坂書房



新しい世紀の初めに当たり、小社もまた旧套を捨てて再生清新の歩みを始めべく、その先登として『斎藤正二著作選集』（全七巻）を刊行することとした。

昨今、心ある人びとからは知の無力・衰退が嘆かれ、世上には思考の保守・右傾化の様相も見え隠れしているとき、知への飽く無き追求のもとに日本文化の深奥を探索しつづけ、真摯直截なる論述で多くの識者に感銘を与え、怠惰な日本人の心に覚醒の警鐘を鳴らしつづける斎藤博士の諸著作を収録刊行することは時宜を得たものと確信する。

著者斎藤正二博士は一九二五（大正一四）年生まれで、所謂、戦中派と呼ばれる世代の人であり、気骨のある自由精神を持ちつづけながら戦中・戦後の半世紀を生き抜いてきた。戦後、弱冠二十一歳にして「アララギ」同人欄作家に推挙されたほど、実作に早熟の才を示して斯界に一頭地をぬきん出たが、さらに詩歌俳と世界を広げ、そこに身を投じて深く芸術精神を学び、やがて学芸部門編集者として大いに活躍し、多くの名著を世に送り出して一流出版社の重要なスタッフとして社の隆盛に貢献した。その間にまた芸芸・美術の評論も手掛けるが、博士の性格から論旨の率直厳正さがともすれば無用の反感を買ひ、讒謗の標的となるなどしてジャーナリストの道を断念する。それより改めて学究生活への再出発を決意し、三十歳にして日本思想史・宗教人類学・教育文化史の領域での研鑽による、独自の研究成果が次第に評価されるようになる。

やがて日本文化史、就中「日本の自然観」の研究という大きな課題が、以後長年に亘る仕事となり、広範な史料を駆使しての多角的な研究は余人の追隨を許さぬものとして大きな評価を得ている。本選集もこの研究成果が主要な部分を占めている。さらに研究は拡がって「やまとだまし」（大和魂）という言葉に象徴されるような、所謂日本伝統イデオロギーの構造に対して鋭いメスを入れてその本質を根本から問い質す分析を行い、またサクラ（桜）に代表されるような日本人独自の具体的な自然観の形成について、思想・歴史・宗教・芸能・科学などの文献も広く渉猟して博覧強記の考証はつとに知られる所である。

これらを総合しての博士の日本における自然史観の歴史と思想的背景の研究は、まさに前人未到の金字塔といえるだろう。更に言えば、斎藤博士は教育学、その中での教育文化史の研究者としての道をも歩みつづけていて、その著述も大きな業績である。人間形成の諸面に教育がいかに関わり、いかなる成果をもたらしたかを博士独特の視点でとらえた諸論も一巻として刊行する。以上本著作選集には斎藤正二博士の今日に至る諸業績を示す重要な著作の大半は収録されている。二十世紀後半半世紀における日本文化を論じたもつとも重要な人物の一人としての斎藤博士の著作選集をここに送る。本集が更に新たな日本を考えるための一助ともなり得れば望外の喜びである。

刊行のことば

八坂書房

■全巻の内容■

●第一巻 日本自然観の研究 形成と定着

序論 自然観と文学的象徴 伝統的自然観のイデオロギー性 花と文学的象徴

第一部 日本自然観のパラダイムとその定立の条件

日本自然観の文化史概要／「自然の発見」から「自然観の受容」へ／日中律令学制の比較学問史的考察・□／日中律令学制の比較学問史的考察・□／律令知識階級における自然観学習の過程／専制支配のもとでのウメ・モモ・サクラの見かた／「懐風藻」の芸術儀礼（自然観の体系）／『万葉集』の政治的思考／自然観の基底にあるもの／「花鳥風月」は人間関係のアナロジー／『古今和歌集』の自然観を分析する

第二部 日本自然観の形成と定着

「文章経国」「君臣唱和」の世界／勅・漢詩集の自然観／「性靈集」―空海という（全人的芸術家の足跡／『西宮記』―漢籍援用の思考）が生んだ自然観／「菅家文章」―（古代詩歌）の自然観の完成と解体／「枕草子」―（類聚的思考）の定着と再創造／「源氏物語」における（春夏秋冬）の存在論的意味／「栄花物語」―極楽浄土の現実化／世俗化／「大鏡」―（風流者）の美学的模索／「歌合集」―（中国起源）の遊戯的要素／「新 朗詠集」の遊宴世界／雑草、雑木、そして雑芸／「今昔物語集」に見る（日本人）の過程

●第二巻 日本自然観の研究 展開の諸相

第三部 日本自然観の形成と定着（つづき）

（転換期）への展望―いけばな前史を視座として／日本自然観の中世的展開／中世美学のなかの（自然美学）／（下廻上）時代の到来―（合理的）自然の発見／（下廻上）の芸術―いけばなのひとり立ち／『本朝文藝』の残照―花と水との組み合わせ／茶の美学―いけばなの美学

第四部 日本自然観の展開事例

（1）松 （2）梅 （3）椿 （4）桜 （5）桃 （6）木瓜 （7）竹 （8）藤 （9）花菖蒲 （10）山吹 （11）萱草 （12）薔 （13）菊 （14）秋草 （15）楓 （16）柳 （17） 粟および牡丹

第五部 花伝書をたずねて ―天文期・慶長期「花伝書」の研究―

一 花伝書誕生時代の社会Ⅱ文化状況／二「君台観左右帳記」に見る「国際感覚」の横／三「仙伝抄」と（人間解放）の論理／四「専心口伝」の（都市的思考）／五「唯心軒花伝書」の（唯物論的思考）／六「文阿弥花伝書・西教寺本」の自然哲学／七「文阿弥花伝書・鹿王院本」の現実感覚／八「陽明文庫」立花故実の禪的要素を疑う／九「小笠原長時花伝書」と（武人狂傲）の美学／一〇「専栄花伝書」の（教育者）的位置／一一「花ふ」に見る知識人の苦悩―（歴史観転換）の試み／一二「立花秘伝抄」が奏でる（天文時代精神への挽歌）／一三「百瓶華序」が収約する慶長時代精神の勝利／一四「真花伝」の発想主体―朱子学的思维／一五「替花伝秘書」のなかに設置された仏教的小宇宙／一六「立花大全」と町人の啓蒙の論理／一七「立花時勢粧」―天文期花伝書の最終帰結

第六部 日本風土―過去と現在

正しい自然観―風景観を確立するために／三つの「日本人の自然観」／「古き郷土」と「新しい郷土」／（海洋的思考）の形成―牧口常三郎少年の場合／『（完訳）怪談』解説―小泉八雲の日本観について／オシラ神とウマのImage―若きネフスキーの奥羽民衆宗教研究―「修行」―あまりにも日本的な／武蔵野の発見／風景―歴史的人間の作品／「自然を愛する」と「自然観を愛する」との間

●第三巻 日本自然観の研究 変化の過程

序論 三つの通史―花と日本人とのかかわり

日本文学史のなかの花／キクの日本文化史概説／ウメとサクラの植物文化史―自然観も絶えず組み換えられ（変化）していく―

第一部 日本自然観の古代的枠組み

花の思想―その相対化のために／古代日本人の天空観／日本人と温泉―（神仙）思想の虚と実／歳時記―中国起源の（政治的思考）／日本人と東西南北／日本人の色彩感覚／サクラと白楽天詩集―或る勉強会における小報告・速記録―／平安王朝びとのサクラ美学／古代文芸史の基礎知識

第二部 中世、そして近世へ―日本自然観の変化過程

日本雑文化を再点検する／「いけばな」成立期の時代精神と背景社会／花を立てる―近世初期管理社会のなかで／芭蕉と元禄期社会文化／サクラと近世本草学者三人―貝原益軒・新井白石・小野蘭山のサクラ理解について―／近世社会の植物文化交流史―「バラの歴史」を読みなおす―／「とりあわせ」の近世美学―「きまり」の記号学的考察―江戸町人文化の一頂点を悪所で発生した特殊用語―／菅江真澄における絶えざる内部変革―「遊歴文人」から「自然誌旅行家」へ―

第三部 明治近代―日本自然観を相対化したひととびと

E・S・モリス「日本人の住まい」訳者解説―その「比較研究」と（民族学的思考）とについて―／《進歩的》思想家としてのラフカディオ・ハーン像―そのスベンサー進化論哲学への傾倒の仕方をもつて―

●第四巻 日本自然観の研究 変容と終焉

序論 日本自然観の窮極にあるもの

一 自然像・自然観・自然概念の窮極にあるもの／二日本の世界観と日本自然観との間／三日本自然観という自然観の変奏曲

第一部 日本自然観の形成と変容

一 古代国家の形成と学校成立／二 菊と日本人―中国原産のキクが日本国花「キク」となるまで／三 サクラとサクラ観との間―「自然を愛する」思想と―「自然観を愛する」観念形態／四 等楊雪舟の「中国の旅」再考―日本水墨画の教育文化史的検証／五 三つの民俗学的仮説―桜の信仰について―／菅江真澄・柳田国男・折口信夫は互いに対立し矛盾する

第二部 自然観および国家観

一「日本人の自然観」を特定せぬほうがよい―サクラを例にとって考える／二 古代日本児童文化史序論―日本人の（子ども）の見かた

●第五巻 日本人とサクラ／花の思想史

日本人とサクラ

まえがき
序章 「日本のサクラ」と「世界のサクラ」
一「日本のサクラ」の現状、および、未来への展望／二 サクラが美しくあるための基礎条件／三「サクラの園」の「桜の園」の住民として

第一章 日本人にとってサクラとは何であったか

一なぜこのような問いが生まれたか／二「サクラの神話」などというものは存在しない／三「サクラの社会神話」―昭和十年代の《散るサクラ》思想／四山田孝雄の場合―孤立する（うるわしいサクラ）思想／五「桜花園」か「松園」か

二「サクラの社会科学」の樹立をめざして
一「サクラの社会神話」から「サクラの社会科学」へ／二 桜博士による「サクラの公理」を手がかりにして（□）／三 桜博士による「サクラの公理」を手がかりにして（□）／四 桜博士による「サクラの公理」を手がかりにして（□）／五 国花という考えかた

第三章 サクラの植物文化誌
一 ふたたび、桜博士による「サクラの公理」を手がかりにして／二 サクラは日本原産とはいえない／三 サクラの種類―ほとんど全部が園芸品種である／四 美しい園芸品種は 鎌倉期、関東農民によって開発された／五 ノメイヨシノの（点と線）

第四章 サクラの象徴文化誌
一 サクラの語原について／二 サクラの信仰について／三 サクラの美学―その歴史的点描／四 花の symbol は固定していない／五（サクラ嫌い）の系譜―朔太郎・賢治・梶井・坂口・大岡

花の思想史

まえがき

第一章 花の発見

日本列島原住民と植物文化／縄文人とトチの花・弥生人とイネの花／大和國家の成長と（大陸の花）

第二章 古代律令国家と花木觀賞（A）
律令国家建設の骨骨―中国詩文の学習―一つ松、あせを―『古事記』の場合／サクラは王権の象徴―『日本書紀』の場合／梅に鶯―『懐風藻』の場合（1）／タケは律令貴族の占有物―『懐風藻』の場合（2）

第三章 古代律令国家と（花木觀賞）（B）
律令官僚知識人のハイカラ美学／つらつら椿―『万葉集』の場合（1）／蓮のごとき美女―『万葉集』の場合（2）／秋の七草―『万葉集』の場合（3）／柳の語原は「Yaga」の木である―『万葉集』の場合（4）／桃の花下照る道―『万葉集』の場合（5）／カキツバタも美女の Sign―『万葉集』の場合（6）

第四章 平安貴族社会に咲き匂う花々
王朝文化の二極―匿名文藝家と匿名文藝家―「機」がカエデと同一化されるまでの過程―『経国集』の場合／「花鳥風月」は人間関係のアナロジー―『古今和歌集』の場合（1）／「天つ星」に響えられたキクの花―『古今和歌集』の場合（2）／撰撰の（ツジ讀美）の宗教文化史的脈流をさぐる―『源氏物語』の場合／ヤマブキと混同された秋冬―『和漢朗詠集』の場合／ボタンと『白氏文集』―『詞花和歌集』の場合／ワスレグサに見る「日本化」の過程―『今昔物語集』の場合

第五章 新時代に咲き乱れる庶民の花々
古代国家の終焉―（新しい人間）の登場／スキの美学・花さかりを見ない（花の美学）―中世の花々／「花伝書」の誕生―近代への展望―戦国乱世の花々

●第六巻 「やまとだまし」の文化史／日本教育文化史序論／動物と日本人

「やまとだまし」の文化史

まえがき

偶像是戦後もなお生きている
一「やまとだまし」に關する四つの偶像／二「やまとだまし」は超国家主義の理論体系であるか／三「やまとだまし」は忠君愛國の新宗教であるか／四「やまとだまし」は武士道と同義語であるか／五「やまとだまし」のシンボル―桜と菊について

□「源氏物語」乙女巻の「大和魂」／二「大鏡」巻二の「やまとだまし」／三『今昔物語集』巻第廿九の「和魂」／四『中外抄』久安元年八月十一日条の「やまとだまし」／五『愚管抄』巻第四鳥羽の「やまとだまし」／六『詠百寮和歌』文章博士の「大和と玉しる」

□「やまとだまし」の實像と虚像
一「やまとだまし」は撰撰時代社会の生活論理である／二「やまとだまし」の不在期と再発見期

日本教育文化史序論

第一章 日本列島の黎明から古代國家の成立まで

一 更新世人類の登場、そして、縄文人の活躍／二 弥生人の稲作文化、そして、倭国誕生／三「教 化 くる」―日本教育事始め／四「論語・千字文、貫進りき」―もうひとつの日本教育事始め／五 冊封体制のなかの日本、そして、聖徳太子「憲法十七条」／六 冊封体制のなかの日本、そして、聖徳太子「憲法十七条」（つづき）／七 大化改新、そして、帰国留学生の果たした役割／八 日本律令國家の建設―東アジア世界の政治力学のなかで／九 学校創設をめぐる幾つかの説明譚

第二章 古代律令國家の教育文化
一 大宝律令の完成―その実施および成立条件／二「学舎」の本質、そして、大学寮の本質／三 律令的仏教―鎮護國家から民衆救済までの道程／四 白鳳天平の学芸文化―その光彩と陰翳／五 遣唐使―東アジア世界という国際政治機構の論理をととして／六 仲麻呂と道鏡、そして、新王朝による平安奠都／七 平安王朝文化の本質―漢文学習の徹底化により形成された思想的地盤

動物と日本人

ブローグ／馬（その一）／馬（その二）／牛／猪／犬／狸／蛙／鶯／燕／雉／山鳥／駒鳥／葭切／狹鷗／鶉／鴛鴦／鷓鴣／鯛／鱈／鱒／鮭／鱒／蜂

●第七巻 教育思想・教育史の研究

例言

- 二育と三育との間―牧口教育理論の基本思考を検証する作業の試み
 - 1 問題の所在／2 従来の説を疑う
- 教師の歴史
 - 1 教師の（祖型）をさぐる／2 教師像の移りかわり／3 日本社会が描く教師像
 - 三「子育て」の記号学的考察
 - 四 教育史の哲学―教授学と教育学との境界
 - 五 モンテスキュー教育思想の研究
 - 1 この論題を選んだ理由／2 モンテスキュー評伝史に關する素描（A）／3 モンテスキュー評伝史に關する素描（B）／4 モンテスキュー評伝史に關する素描（C）／5 『法』の精神のキーワードを検める（その一）／6 『法』の精神』のキーワードを検める（その二）／7 モンテスキュー vs ルソ
 - 六 フランクリンの教育思想
 - 1 『自伝』の成立と、「自伝」以後のフランクリン／2 フランクリンにおける（近代的人間）およびその全体像／3 『自伝』はどのように読むべきか
 - D・H・ロレンスの教育思想―『チャタレイ夫人の恋人』にあらわれた教育理論
 - 七 D・H・ロレンスの教育思想―『尾崎行雄の初期教育思想研究
 - 1 なぜこのような論題を選んだか／2 尾崎行雄について的小スケッチ／3 二つの青春―尾崎行雄の場合／4 二つの処女作（a）―『公開演説法』の思想的動機／5 二つの処女作（b）―『権理提要』にみるスベンサー理解／6 思想家・尾崎行雄の理論形成プロセス
 - 八 『日本―一つの試論』補注―ラフカディオ・ハーン思想家像―探索のために